

2009. 10. 20

### 1. アダム・スミス (1723～1790 イギリス)

#### (1) 時代背景

イギリス産業革命の進行→多くの産業資本家たちの誕生



自己の利己的な快樂(富)追求がどうしたら他人のそれと調和するか  
(個人の幸福と社会のあり方の探究)

#### (2) 著書:

#### (3) 思想

##### ①人間の欲望をどうとらえるか

前近代(キリスト教道徳)→罪惡視

スミス→利益や幸福を求める自然な感情=人間活動の基盤



[ ] を肯定



同時に、「 」という道徳感情を備えている



心の中に自己の行動と性格の「 」を作ること



∴利己心に任せても、無秩序にはならない

##### ②経済思想

人間=自己の利益を追求する存在 ( )



利己心が経済活動を促進



自由競争→価格メカニズムによって需要と供給は自動的に調整される  
(invisible hand= )

##### ③国家と経済

国家は経済活動に介入すべきではない→「 」( )



自由放任主義を唱える ( )

### 2. ベンサム (1748～1832 イギリス)

#### (1) 快樂主義

→人間は( )を欲し、( )をさけようとする



∴快樂をもたらすかどうか善悪の基準である(ベンサム)



幸福を増大させるもの、苦痛を減少させるもの=( )

幸福を減少させるもの、苦痛をもたらすもの=( )

**「快樂を生む全てのものは、それが生む明白な快樂に比例して、善である。」**

**「自然は人類を、快樂と苦痛という、二つの主権者の支配下に置いた。われわれに何をすべきかを指示し、われわれが何をすべきかを決定するのは、ただこの二つだけである。」『道徳と立法の諸原理序説』(1789)**



「 」→ \_\_\_\_\_

#### (2) 功利主義

行為の善悪の基準=それが幸福や快樂の増大にとってどれだけ有用か(役立つか)



「功利性」

カント→「一般に、富・名譽・才能・健康などは幸福の条件であり、善である。」(しかしこれらは常に善であるとは限らない)「無制限に善とみなされるもの」=「善意志」

##### ①功利主義の原則

1) 全ての個人を平等に一単位として扱う。

「何人も( )と数え、( )以上とは数えない。」

2) 全体の快樂の総量の増加=善

「 \_\_\_\_\_ 」

(the greatest happiness of the greatest number)」

=立法者の任務は国家における幸福の総量を出来るだけ増加すること。

3) 快樂そのものを与えることは出来ないから、快樂そのものではなく、快樂の手段

(= )を人々に与えること。

「( )は苦痛や快樂の量を測る手段である。」

## ②快樂計算

→快苦は量的に計算できる（ベンサムは具体例はあげてない）

- 1) 強さ
- 2) 持続性（時間の長さ）
- 3) 確実性（確かさ、はっきりと経験できる）
- 4) 遠近性（快樂を味わえる時期の近さ、遠さ）
- 5) 多産性（ある快樂が次々と他の快樂をもたらす）
- 6) 純粹性（苦痛を伴わない）
- 7) 範囲（その快苦が及ぶ人々の数）

## ③制裁(sanction)

→個人の幸福が社会の幸福と一致する理由

- 1) [ ] 的制裁（自分の不注意で自然から受ける制裁, 病気, 火事）
- 2) [ ] 的制裁（国家による刑罰や報償）
- 3) [ ] 的制裁（社会的非難, 他人から援助されなくなる）
- 4) [ ] 的制裁（神から与えられるもの, 神罰）

↓ \*ベンサム→2) を重視

∴各自が自分の幸福を追求していけば結果的に社会全体が幸福になる

[応用問題] ジョン・ハリスが呈示した「生き残るための抽選(The Survival Lottery)」という問題を考えてみよう。

いま、臓器移植の技術が向上し、臓器移植で完全に病気が治るようになったと仮定する。すると、心臓病と肝臓病で死にかかっている二人の病人が、病院の近くにいる者を捕まえて殺し自分たちに移植しないなら、自分たちが死ぬのは医者の責任だと主張し始める。しかし実際にそんなことを実行したら、社会不安を引き起こすだろう。（例えば、病院には恐くて行けなくなる。今でもそうだが。）そこで次のような、臓器提供の抽選制度を作ることにする。

社会のメンバーのうち、健康な者には全て抽選番号が与えられる。どうしても必要な臓器が「自然」死によって入手できない場合、医師はコンピューター・プログラムでランダムに数字を選び、その当選者は自分の健康な臓器を病人に提供しなければならないものとする（サバイバル・ロタリー）。そうすると、一人の犠牲によって少なくとも2人以上の病人が助かるから、現在よりも多くの人が健康で長生きできるようになる。（ただし、例えば煙草の吸いすぎで肺癌になった者など、不節制で病気になった人は自業自得だから対象外とする。）

これは、功利主義の原則「最大多数の最大幸福」によって判断すれば、「善い」ことである。

反論（1）「くじの犠牲者は何の罪も無いのに殺されるのは非人道的だ。」

↓

自分の臓器の病気のために死ぬ病人にも罪は無い。健康な人は、たまたま運がよくて健康なだけで、病人よりも生きる値打ちがあるという訳ではない。

反論（2）「病気で死ぬ人を放置することと、健康な人を殺すこととは道徳的に別である。」

↓

多くの人の命を救うのを避けて通るのも、結果的に殺人になる。何もしないで放置することも一つの「行為」である。「消極的に死ぬに任せること」と「積極的に殺すこと」との違いに基づいてこれに反論しようとするのは、救うことができる命を放置して死なせるのは結果的に殺人になるのではないか、という問いを避けているだけだ。

## 3. ジョン・スチュアート・ミル（1806～1873 イギリス）

→ベンサムの量的功利主義、外的制裁論に修正を加えた。

### (1) 快樂の質

→快樂の質的差異

[ ] 快樂の方が [ ] 快樂より質的に優れている  
「満足した( )であるよりは不満足な( )のほうがよく、満足した( )であるよりは不満足な( )であるほうがよい」(質的功利主義)

### (2) 制裁

→4つの制裁（外的制裁）に内的制裁（ ）を加えた

↑  
重視

### (3) 功利における利己と利他

→他人を幸福にすること（ 主義）＝質的に高い快樂  
イエスの黄金律「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」(隣人愛)こそ、功利主義道徳の理想的極致である

↓  
ミル→「功利主義を超えた功利主義者」とよばれる

#### 4. コント (1798~1857 フランス)

(1) 時代背景

フランス革命→ジャコバン派独裁→ナポレオン帝政→アンシャ・レジーム (旧体制)

(2) 思想

正義や理念の対立→暴力的な決着へ



現象を観察して法則を把握し、法則に基づいて [ ] し、計画的に生活の改善を図る



観念的な思想を排除→事実に基づいて理論を構築する (= )



[ ] の創始

(3) 人間精神の3段階

[ ] 段階



[ ] 段階



[ ] 段階 (科学的精神)

[応用問題] ジョン・ハリスが呈示した「生き残るための抽選(The Survival Lottery)」という問題を考えてみよう。

いま、臓器移植の技術が向上し、臓器移植で完全に病気が治るようになったと仮定する。すると、心臓病と肝臓病で死にかかっている二人の病人が、病院の近くにいる者を捕まえて殺し自分たちに移植しないなら、自分たちが死ぬのは医者の責任だと主張し始める。しかし実際にそんなことを実行したら、社会不安を引き起こすだろう。(例えば、病院には恐くて行けなくなる。今でもそうだが。)そこで次のような、臓器提供の抽選制度を作ることにする。

社会のメンバーのうち、健康な者には全て抽選番号が与えられる。どうしても必要な臓器が「自然」死によって入手できない場合、医師はコンピューター・プログラムでランダムに数字を選び、その当選者は自分の健康な臓器を病人に提供しなければならないものとする(サバイバル・ロタリー)。そうすると、一人の犠牲によって少なくとも2人以上の病人が助かるから、現在よりも多くの人が健康で長生きできるようになる。(ただし、例えば煙草の吸いすぎで肺癌になった者など、不節制で病気になった人は自業自得だから対象外とする。)

これは、功利主義の原則「最大多数の最大幸福」によって判断すれば、「善い」ことである。

反論(1)「くじの犠牲者は何の罪も無いのに殺されるのは非人道的だ。」

↓

自分の臓器の病気のために死ぬ病人にも罪は無い。健康な人は、たまたま運がよくて健康なだけで、病人よりも生きる値打ちがあるという訳ではない。

反論(2)「病気で死ぬ人を放置することと、健康な人を殺すこととは道徳的に別である。」

↓

多くの人の命を救うのを避けて通るのも結果的に殺人になる。何もしないで放置することも一つの「行為」である。「消極的に死ぬに任せること」と「積極的に殺すこと」との違いに基づいてこれに反論しようとするのは、救うことができる命を放置して死なせるのは結果的に殺人になるのではないか、という問いを避けているだけだ。

### 3. ジョン・スチュアート・ミル(1806~1873 イギリス)

→ベンサムの量的功利主義、外的制裁論に修正を加えた。

(1) 快樂の質

→快樂の質的差異

[ ] 快樂の方が [ ] 快樂より質的に優れている  
「満足した( )であるよりは不満足な( )のほうがよく、満足した( )であるよりは不満足な( )であるほうがよい」(質的功利主義)

(2) 制裁

→4つの制裁(外的制裁)に内的制裁( )を加えた

↑

重視

(3) 功利における利己と利他

→他人を幸福にすること( )主義 = 質的に高い快樂  
イエスの黄金律「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」(隣人愛)こそ、功利主義道徳の理想的極致である

↓

ミル→「功利主義を超えた功利主義者」とよばれる

### 4. コント(1798~1857 フランス)

(1) 時代背景

フランス革命→ジャコバン派独裁→ナポレオン帝政→アンシャ・レジーム(旧体制)

(2) 思想

「正義」や「理念」の対立→暴力的な決着へ

↓

社会現象を観察して [ ] を把握し、それに基づいて将来を予見し、計画的に生活の改善を図る

↓

観念的な思想を排除→事実に基づいて理論を構築する(= )

↓

(科学的な手法を哲学に取り入れる)

[ ] の創始

(3) 人間精神の3段階

神学的段階

↓

形而上学的段階

↓

[ ] 段階(科学的精神)

2009. 10. 20

1. アダム・スミス (1723～1790 イギリス)

(1) 時代背景

イギリス産業革命の進行→多くの産業資本家たちの誕生



自己の利己的な快樂(富)追求がどうしたら他人のそれと調和するか  
(個人の幸福と社会のあり方の探究)

(2) 著書『国富論(諸国民の富)』『道徳感情論』

(3) 思想

①人間の欲望をどうとらえるか

前近代(キリスト教道徳)→罪惡視

スミス→利益や幸福を求める自然な感情=人間活動の基盤



利己心を肯定



同時に、「他人への同情(sympathy=共感)」という道徳感情を備えている



心の中に自己の行動と性格の「公平な傍観者(観察者・第三者)」を作ること



∴利己心に任せても、無秩序にはならない

②経済思想

人間=自己の利益を追求する存在(ホモ・エコノミクス)



利己心が経済活動を促進



自由競争→価格メカニズムによって需要と供給は自動的に調整される  
(=invisible hand 見えざる手)

③国家と経済

国家は経済活動に介入すべきではない→「小さな政府」(夜警国家)



自由放任主義を唱える(古典派経済学)

2. ベンサム (1748～1832 イギリス)

(1) 快樂主義

→人間は快樂を欲し、苦痛をさけようとする



∴快樂をもたらすかどうか善悪の基準



幸福を増大させるもの、苦痛を減少させるもの=善

幸福を減少させるもの、苦痛をもたらすもの=悪

「快樂を生む全てのものは、それが生む明白な快樂に比例して、善である。」

「自然は人類を、快樂と苦痛という、二つの主権者の支配下に置いた。われわれに何をすべきかを指示し、われわれが何をするかを決定するのは、ただこの二つだけである。」『道徳と立法の諸原理序説』(1789)



「快樂の増大と苦痛の減少」→全ての道徳と立法の原理

※善とは何か

カント→「一般に、富・名誉・才能・健康などは幸福の条件であり、善である。」(しかしこれらは常に善であるとは限らない)「無制限に善とみなされるもの」=「善意志」

(2) 功利主義

行為の善悪の基準=それが幸福や快樂の増大にとってどれだけ有用か(役立つか)



「功利性」

①功利主義の原則

1) 全ての個人を平等に一単位として扱う。

「何人も一人と数え、一人以上とは数えない。」

2) 全体の快樂の総量の増加=善

「最大多数の最大幸福(the greatest happiness of the greatest number)」

=立法者の任務は国家における幸福の総量を出来るだけ増加すること。

3) 快樂そのものを与えることは出来ないから、快樂そのものではなく、快樂の手段(=貨幣)を人々に与えること。

「貨幣は苦痛や快樂の量を測る手段である。」

②快樂計算

→快苦は量的に計算できる(ベンサムは具体例はあげてない)

1) 強さ

2) 持続性(時間の長さ)

3) 確実性(確かさ、はっきりと経験できる)

- 4) 遠近性 (快樂を味わえる時期の近さ、遠さ)
- 5) 多産性 (ある快樂が次々と他の快樂をもたらす)
- 6) 純粹性 (苦痛を伴わない)
- 7) 範囲 (その快苦が及ぶ人々の数)

③制裁 (sanction)

→個人の幸福が社会の幸福と一致する理由

- 1) 物理 (自然) 的制裁 (自分の不注意で自然から受ける制裁, 病気, 火事)
  - 暴飲暴食、運動不足、自然破壊?
- 2) 法律 (政治) 的制裁 (国家による刑罰や報償)
- 3) 道徳的制裁 (社会的非難, 他人から援助されなくなる)
- 4) 宗教的制裁 (神から与えられるもの, 神罰) \*ベンサム→②を重視

↓

∴各自が自分の幸福を追求していけば結果的に社会全体が幸福になる

[応用問題] ジョン・ハリスが呈示した「生き残るための抽選 (The Survival Lottery)」という問題を考えてみよう。

いま、臓器移植の技術が向上し、臓器移植で完全に病気が治るようになったと仮定する。すると、心臓病と肝臓病で死にかかっている二人の病人が、病院の近くにいる者を捕まえて殺し自分たちに移植しないなら、自分たちが死ぬのは医者 の責任だと主張し始める。しかし実際にそんなことを実行したら、社会不安を引き起こすだろう。(例えば、病院には恐くて行けなくなる。今でもそうだが。) そこで次のような、臓器提供の抽選制度を作ることにする。

社会のメンバーのうち、健康な者には全て抽選番号が与えられる。どうしても必要な臓器が「自然」死によって入手できない場合、医師はコンピューター・プログラムでランダムに数字を選び、その当選者は、自分の健康な臓器を病人に提供しなければならないものとする。そうすると、一人の犠牲によって、少なくとも二人以上の病人が助かるから、現在よりも多くの方が健康で長生きできるようになる。(ただし、例えば、煙草の吸いすぎで肺癌になった者など、不節制で病気になった人は自業自得だから、対象外とする。) これは、功利主義の原則「最大多数の最大幸福」によって判断すれば、「善い」ことである。

反論 (1) 「くじの犠牲者は何の罪も無いのに殺されるのは非人道的だ。」

↓

自分の臓器の病気のために死ぬ病人にも罪は無い。健康な人は、たまたま運がよくて健康なだけで、病人よりも生きる値打ちがあるという訳ではない。

反論 (2) 「病気で死ぬ人を放置することと、健康な人を殺すこととは道徳的に別である。」

↓

多くの人の命を救うのを避けて通るのも、結果的に殺人になる。何もしないで放置することも、殺人行為である。消極的に死ぬに任せることと積極的に殺すこととの違いに基づいて、これに反論しようとするのは、救うことが出来る命を放置して死なせるのは、結果的に殺人になるのではないか、という問いを避けているだけだ。

[http://216.239.41.104/search?q=cache:9ae1CNxxeX4J:www.ne.jp/asahi/village/good/bentham.html+%E3%83%99%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%A0%E3%80%80%E6%9C%80%E5%A4%A7%E5%A4%9A%E6%95%B0%E3%81%AE%E6%9C%80%E5%A4%A7%E5%B9%B8%E7%A6%8F&hl=ja&lr=lang\\_ja](http://216.239.41.104/search?q=cache:9ae1CNxxeX4J:www.ne.jp/asahi/village/good/bentham.html+%E3%83%99%E3%83%B3%E3%82%B5%E3%83%A0%E3%80%80%E6%9C%80%E5%A4%A7%E5%A4%9A%E6%95%B0%E3%81%AE%E6%9C%80%E5%A4%A7%E5%B9%B8%E7%A6%8F&hl=ja&lr=lang_ja)

3. ジョン・スチュアート・ミル (1806~1873 イギリス)

→ベンサムの量的功利主義, 外的制裁論に修正を加えた。

(1) 快樂の質

→快樂の質的差異

精神的快樂の方が肉体的快樂より質的に優れている

「満足した豚であるよりは不満足な人間のほうがよく、満足した愚か者であるよりは不満足なソクラテスであるほうがよい」(質的功利主義)

(2) 制裁

→4つの制裁 (外的制裁) に内的制裁 (良心) を加えた

↑

重視

(3) 功利における利己と利他

→他人を幸福にすること (利他主義) = 質的に高い快樂

イエスの黄金律「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」(隣人愛)こそ、功利主義道徳の理想的極致である

↓

ミル→「功利主義を超えた功利主義者」とよばれる

#### 4. コント (1798~1857 フランス)

##### (1) 時代背景

フランス革命→ジャコバン派独裁→ナポレオン帝政→アンシャ・レジーム (旧体制)

##### (2) 思想

「正義」や「理念」の対立→暴力的な決着へ

↓

現象を観察して法則を把握し、それに基づいて将来を予見し、計画的に生活の改善を図る

↓

観念的な思想を排除→事実に基づいて理論を構築する (=実証主義)

↓

(科学的な手法を哲学に取り入れる)

社会学の創始

##### (3) 人間精神の3段階

神学的段階→形而上学的段階→実証的段階 (科学的精神)

ベンサムは、快楽主義の立場から出発する。快楽主義とは、「善=快」という立場だが、エピクロスの消極的な快楽主義と違って、大きければ大きい程よい、というのが近代の快楽主義である。ベンサムは言う。

「快楽を生む全てのものは、それが生む明白な快楽に比例して、善である。」

「自然は人類を、快楽と苦痛という、二つの主権者の支配下に置いた。われわれに何をすべきかを指示し、われわれが何をするかを決定するのは、ただこの二つだけである。」

従って、「快楽の増大と苦痛の減少」が、全ての道徳と立法の原理である。

ベンサムはこれを「快楽の数値を計算する」という方法で算定しようとする。

また、一人が不幸になっても、10人がそれ以上に幸福になれば、全体としての幸福の量は増加するから、善であることになる。この配分の問題は功利主義の最大の弱点だろう。→生き残るための抽選)

### Ⅲ) 功利主義 (Utilitarianism)

#### 1 全ての個人を平等に一単位として扱う。

「何人も一人と数え、一人以上とは数えない。」

全体の快楽の総量の増加=善

#### 2 立法者の任務は国家における幸福の総量を出来るだけ増加すること。

「最大多数の最大幸福 (the greatest happiness of the greatest number)」=「功利性の原理 (the principle of utility)」

3 快楽そのものを与えることは出来ないから、快楽そのものではなく、快楽の手段 (=貨幣) を人々に与えること。

「貨幣は苦痛や快楽の量を測る手段である。」

<http://www.ne.jp/asahi/village/good/bentham.html>

そして個人の幸福が社会の幸福と一致しない場合は、物理的制裁、政治的制裁、道徳的制裁、宗教的制裁などのサンクション (制裁) を受けることになるとしたのです。ベンサムにおいては、個人がそれぞれの幸福を追求することを素直に是認する個人主義と、万人を平等に扱うべきだとする民主的な捉え方が鮮明です。彼は保守的なイギリスの貴族的な特権を守ろうとする体質を痛烈に批判したのです。

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/2663/kindai/kouri.htm>

選択倫理ミニレポートNo.5

3年 組氏名 \_\_\_\_\_

〔課題〕 最大多数の最大幸福を基本原理とする功利主義の問題点は何か。また、それに代わる個人の幸福と社会の幸福を両立させる原理はあるか。

政治の目的→最大多数の最大幸福（多数決原理）

↓

沖縄米軍基地→騒音，犯罪，標的となる危険

→沖縄の人の苦痛+本土の安全 在日米軍がない場合の安全保障  
(防衛費，憲法との兼ね合い)

選択倫理ミニレポートNo.5

3年 組氏名 \_\_\_\_\_

〔課題〕 在日米軍基地または原子力発電所の問題を「最大多数の最大幸福」という観点から論じなさい。